60歳代の高齢者が描く人生の見通し一ナラティブスロープによる分析一

籔脇 健司¹⁾,原 詩織²⁾,大原 慶子³⁾,荻野 雄太⁴⁾,矢田部真衣⁵⁾

- 1) 吉備国際大学保健医療福祉学部
- 2) 茅ヶ崎新北陵病院
- 3) 京都大原記念病院
- 4) 石東病院
- 5) 老人保健施設虹

Key words: 高齢者, 人生の見通し, ナラティブスロープ

要旨:本研究の目的は、退職後の60歳代高齢者が、自分の人生の振り返りを通して将来をどのように見通すのか、その特徴を明らかにすることであった。また、半構成的インタビューを通して作成されたナラティブスロープを分析し、将来の見通しを予測する方法を提案することも目的とした。インタビューガイドは、作業遂行歴面接第2版の推奨質問を参考にしたものを使用した。在宅生活が自立している60歳代高齢者8名のナラティブスロープを加減速線法によって分析した結果、人生の見通しには、過去波乱 - 将来挽回、過去悪化 - 将来回復、過去良好 - 将来維持という3タイプの特徴をもつことが明らかとなった。さらに、過去のナラティブスロープの傾向を加減速線法によって分析し、異なる将来の見通しを予測する有益な方法が提案された。

受付日:2014年8月1日 受理日:2015年9月7日 発行日:2015年10月15日

はじめに

超高齢社会のわが国では、2015年に団塊世代全てが高齢者となるため、高齢人口のさらなる増加が予見されている¹⁾. 高齢期には、心身機能の低下に加えて、定年退職による経済力の減退、社会的地位・役割の喪失・変化、配偶者や友人の死といった喪失体験をともなうとされる²⁾. この喪失体験は、今後の高齢人口の増加と相まって、生きがいや主観的幸福感が低下した高齢者が増大するという、大きな社会的問題となるおそれがある。そもそも人は、誰もが幸福で生きがいに満ちた高齢期を迎えたいと願っている³⁾. しかしErikson ⁴⁾ は、老年期には自身の生涯を振り返り、自分なりの存在価値を見出す「統合」と自己の人生を悔いて絶望感に陥る「絶望」という心理社会的危機に陥ると述べている。したがって、高齢者は喪失体験に加えて、Eriksonが述べるような相反する認識をもちながら生活している可能性がある。

クライエントの健康と幸福な生活を推進する専門職で ある作業療法では、高齢者の発達段階を熟知し、現在か ら将来にかけての人生をいかに見通しているかを理解することが重要である。中原 5)らによると,向老期世代が高齢期に望む生き方は,現在の生き方の延長線上にある可能性を示唆した。しかし,国内の高齢期作業療法実践を概観すると,ナラティブを通してクライエントの過去から現在の人生物語を理解して介入した報告 6,7)が多く,高齢者の将来の見通しに焦点を当てた報告はほとんど見当たらないのが現状である。

ISSN: 2188-8418

Jonsson® らは、退職後の生活に関するナラティブを 退職前後で聴取し、そこからナラティブスロープを作成 して特徴を比較した結果、退職前に退職後の生活を発展 的、または安定的に見通していた者は、実際の退職生活 も維持される傾向にあることを明らかにした。この研究 は、高齢者の将来の見通しを検討するうえで非常に有用 な知見であるが、退職生活に関するナラティブの変化を 比較したものであり、これまでの人生のナラティブと将 来の見通しの関連を検討したものではない。

本研究の目的は、人生の転換期にある退職後の60歳代

高齢者が、自分の人生の振り返りを通して将来をどのように見通すのか、その特徴を明らかにすることであった。また、半構成的インタビューを通して作成されたナラティブスロープを分析し、将来の見通しを予測する方法を開発することも目的とした。高齢者における人生の見通しの特徴を明らかにすることで、作業療法実践において、その人の見通しに合った目標設定を行うことが容易となり、その人らしい人生の構築に寄与することが可能となると考えられる。

なお、本研究における人生の見通しとは、「これからの人生において起こりうる出来事を予測し、今後の将来について洞察すること」と操作的に定義する。ナラティブとは、語るという行為を示す「語り」と語られたものという形式や構造を示す「物語」の相互的で連続的な関係を表す言葉であるとする野口の解釈⁹⁾を定義として用いた。

方 法

1. 対象

在宅生活が自立している60歳代高齢者8名を対象とした.抽出方法は便宜的サンプリングで8名とも研究者の知人であったが、可能な限り、性別、家族構成、退職前の職業(職種)に偏りが出ないよう配慮した.対象者の性別は男性5名、女性3名、平均年齢は65.1±2.4歳(最小62歳、最大69歳)であり、退職後平均4.8±4.9年経っていた.詳細を表1に示す.

なお,本研究はヘルシンキ宣言の倫理規範に基づき, 対象者の個人情報保護と権利擁護に努めることを説明 し,研究協力への同意を文書にて得た後に実施した.

2. データ収集方法

1) インタビューガイド

本研究では、人生に関するインタビューガイド(表2) を用いて、半構成的インタビューを実施した。インタビ

				201 7030日70至11日刊			
	性別	年齢	家族	既往	以前の職業	退職後	趣味
A氏	男性	66歳	妻	胃癌	公営企業社員	5年	ゴルフ, 野球
B氏	女性	67歳	夫, 姑	なし	公営企業社員	13年	御詠歌、生け花など
C氏	男性	69歳	妻, 母親	腎臟疾患,糖尿病,白内障	国家公務員	12年	カメラ,石斛
D氏	男性	66歳	4世代(母親~孫)	高血圧	自動車工場工員	1年	野菜作り
E氏	女性	63歳	3世代(自身~孫)	なし	製造業	3年	踊り,大正琴など
F氏	男性	65歳	妻	なし	建設業	1年	ハイキング, 錦鯉の 飼育
G氏	女性	63歳	夫	手指の切断	事務員	1年	華道、茶道など
H氏	男性	62歳	妻,娘	痛風	工業高校教師	2年	山歩き, 釣り, サイ クリング

表1 対象者の基本情報

表2 人生に関するインタビューガイド (要約)

- 1. あなたが行う日課や担う役割について、現在と過去、将来にわたって次のようなことをおたずねします
 - ・朝起きてから寝るまでの間に行っている日課や担っている役割 (例:家事,孫の世話,趣味を楽しむ,町内の委員など) にはどんなことがありますか?
 - ・昔, 行っていた日課や担っていた役割にはどんなことがありますか?
 - ・これからの人生で新たに増えると思う日課や役割はありますか?
- 2. あなたが行う活動について、現在と過去、将来にわたって次のようなことをおたずねします
 - ・現在(あるいは過去, 将来), 仕事や仕事に近いような活動として行っていることがありますか? (例: 会社員, 農業, 家事)
 - ・現在 (あるいは過去,将来),楽しめる活動や大切な活動はありますか?
 - ・現在(あるいは過去、将来)の目標はどんなことですか?
- 3. あなたの人生の分岐点となるような重大な出来事について、次のようなことをおたずねします
 - ・自分の人生の中で最もよくやっていた時期,大きな成功をした時期,うまくいった時期はいつですか?その内容はどんなことですか?
 - ・自分の人生の中で最悪な時期,大きな失敗をした時期,うまくいかなかった時期はいつですか?その内容はどんなことですか?
 - ・これまでのどんな出来事や経験が今のあなたをつくったのですか?その出来事や経験があったのはいつですか?その内容はどんなことですか?
 - ・今後の人生を良い方向に考えますか、悪い方向に考えますか?将来予測される出来事はどんなことですか?
 - ・もしも将来を自分が望むように変えることができるとすれば、あなたは何をしていると思いますか?

ューガイドは、人間作業モデルの評価法の一つである作業遂行歴面接第2版(Occupational Performance History Interview version 2.0:以下、OPHI-II)100の推奨質問を参考に作成した。この推奨質問は5つのトピック領域で構成されているが、今回は人生の見通しに関連する「作業役割」「日課」「活動選択および作業選択」「重大な人生の出来事」という4領域の質問を参考にした。作業環境や作業行動への環境の影響に焦点を当てる「作業行動場面」は、作業や役割との関連の中で聴取するため、使用しなかった。

2) ナラティブスロープ

半構成的インタビューの実施後に、インタビュアー以外の研究者がナラティブスロープを作成した。ナラティブスロープとは、クライエントよって語られた物語の筋書きを示すもの¹¹⁾で、過去、現在、そして将来に至る生活上の出来事が良い事柄か悪い事柄かをグラフにプロットすることで作成される。このナラティブスロープによって、クライエントの人生が時間の経過にしたがってどのように変化したのか、全体的な意味を明らかにすることができる。

3)調査手順

調査は対象者の自宅で個別に行った。インタビュー開始前に家族や以前の職業などの基本情報を聴取し、その後、人生に関する半構成的インタビューを実施した。インタビューは時間の制限を設けず、質問に対する語りが得られなくなるまで継続した。対象者1名に対して研究者4名を配置し、基本的に1名がインタビュアーとなり、もう1名が情報の収集内容を確認するなどの進行の補佐を行った。他の2名はインタビュー内容を聞き、語られた内容に基づき各自で40歳以降のナラティブスロープを作成した。青年期以前のナラティブは、長期間経過しているために時期の想起や出来事の良い、悪いという程度の判断が不明確になりやすい。そこで、信頼性の高いスロープを作成するために、スロープの起点を壮年期(40歳以降)に設定した。

描き上げた2本のナラティブスロープは、その場で対象者に提示し、より自分の人生に近いものを選択してもらい、スロープの細かな部分を対象者とともに修正して最終的な同意を得た.通常、インタビュー実施からナラティブスロープ作成までの手順を1名で進めることが多いが、自分の人生の振り返りを通して将来をどのように見通すのか、その特徴を明らかにする十分な語りを引き出し、その傾向の準統計学的分析を可能とするナラティブスロープを作成するために、研究者を複数配置した.

インタビュー内容は、対象者に許可を得てICレコーダーで記録した。インタビューは2013年2月9日から9

月20日までの間に実施した.

3. データ分析

1)加減速線による分析

過去と現在から将来に至るナラティブスロープの傾向を分析するために、準統計学的方法である加減速線法¹²⁾を用いた.ここでは、過去と将来のナラティブスロープに加減速線(表 3)を引き、それぞれの加減速線における勾配を算出した。今回は1年あたり生活状況が10%変化した場合に勾配を1.0として計算した。

また、人生の見通しの変化を検討するために、将来と過去の勾配の変化量を算出した.変化量の大きな者ほど、退職を機に好転する人生の見通しを立てていると判断できる. ただし、過去の勾配が大きい場合は、変化量が小さくても人生の見通しが不良とは限らない.本研究では、過去と将来の勾配とその変化量の組み合わせを分析し、対象者を見通しの特徴別に分類した. さらに、その特徴を明らかにするために、変化量のタイプ別平均値を算出した.

2) インタビュー内容の分析

初めにICレコーダーに記録したインタビュー内容から逐語録を作成した.次に,逐語録の中から将来に関する語りを抽出し,回答内容を対象者別に整理した.その後,人生の見通しの特徴別に基本情報と語りの共通点を要約した.

結 果

1. 人生の物語とナラティブスロープ

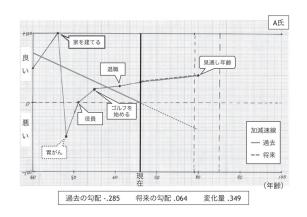
対象者の物語の概要をナラティブスロープとともに説明する。それぞれのスロープと適用した加減速線を図1-1, 1-2 に示す。なお,インタビューの所要時間は,1 名当たり最短で43分,最長で141分であった。

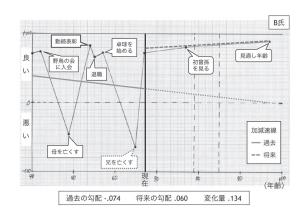
1) A氏

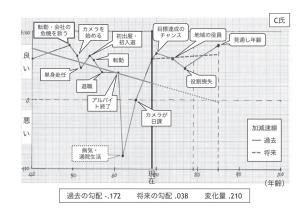
現在66歳で退職は5年前であった。A氏の最良な時期

表3 加減速線の作成手順

- ①過去のスロープに対し,2年ごとにデータとしてプロットを打つ
- ②時系列にそって前半と後半のデータ群に分割する垂線を 引く
- ③前半と後半をさらに半分に分ける垂線を点線で引く
- ④ 2つのデータ群それぞれの中央値と点線との交点を定める
- ⑤前半と後半で定めた交点を通る直線を引く
- ⑥直線をその上下でデータが同数となるような位置に平行 移動させ、加減速線とする
- ⑦現在から将来のスロープも上記と同様に処理する







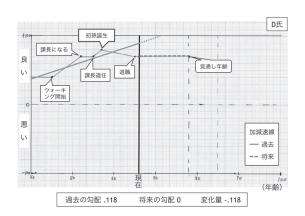


図1-1 ナラティブスロープと加減直線(A氏~D氏)

の出来事は46歳で家を建てたこと、最悪な時期の出来事は48歳で胃がんになったことであった。人生の見通しがつく年齢は80歳までであった。加減速線は過去に下降し、将来は上昇、勾配の変化量は0.349であった。

2) B氏

現在67歳で退職は13年前であった. B氏の最良な時期の出来事は54歳で勤続表彰を受けたこと、最悪な時期の出来事は65歳で兄を亡くしたことであった. 将来, 初曾孫を見るという目標があり、人生の見通しがつく年齢は97歳までであった. 加減速線は過去に下降し、将来は上昇, 勾配の変化量は0.134であった.

3) C氏

現在69歳で退職は12年前であった。C氏の最良な時期の出来事は49歳で転勤し、会社の危機を救ったこと、最悪な時期の出来事は62歳で病気になり、通院生活が始まったことであった。来年、目標達成のチャンスが到来し、その後地域での役割の獲得や喪失という出来事を予想していた。人生の見通しがつく年齢は85歳までであった。

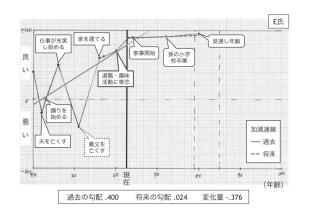
加減速線は過去に下降し、将来は上昇、勾配の変化量は 0.210であった.

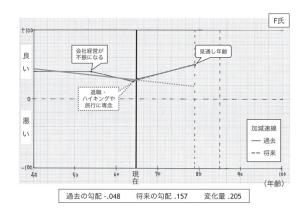
4) D氏

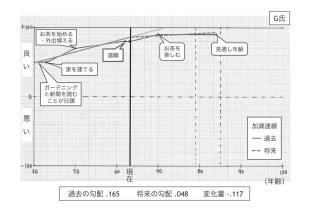
現在66歳で退職は1年前であった. D氏の人生の出来事は全て良い事柄として認識されており、最良な時期の出来事は57歳で初孫が誕生したことであった. 人生の見通しがつく年齢は78歳までであった. 加減速線は過去に上昇し、将来はそれを維持、勾配の変化量は-0.118であった.

5) E氏

現在63歳で退職は3年前であった.E氏の最良な時期の出来事は60歳で退職を機に趣味活動に専念できるようになったこと、最悪な時期の出来事は51歳で義父が亡くなったことであった.近い将来、家事を受け持つという日課を予想していた.人生の見通しがつく年齢は80歳まであった.加減速線は過去に上昇し、将来はそれを維持、勾配の変化量は-0.376であった.







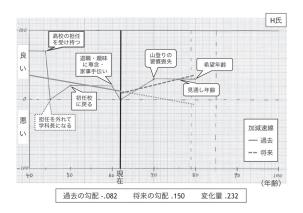


図1-2 ナラティブスロープと加減直線(E氏~H氏)

6) F氏

現在65歳で退職は1年前であった. F氏の人生の出来 事は全て良い事柄として認識されていたが, 比較的悪い 時期の出来事は64歳で退職したことであった. 人生の見 通しがつく年齢は79歳までであった. 加減速線は過去に 下降し, 将来は上昇, 勾配の変化量は0,205であった.

7) G氏

現在63歳で退職は1年前であった.G氏の人生の出来事は全て良い事柄として認識されており、最良な時期の出来事は62歳で退職したことであった.将来は趣味活動であるお茶を楽しむことを予想していた。人生の見通しがつく年齢は84歳までであった.加減速線は過去に上昇し、将来はそれを維持、勾配の変化量は-0.117であった.

8) H氏

現在62歳で退職は2年半前であった. H氏の人生の出来事に悪いと認識された事柄はなく, 最良な時期の出来事は23歳から44歳まで担任を受け持っていたこと, 比較的悪い時期の出来事は45歳で担任を外れ, 学科長になっ

たことであった. 退職した現在も担任を外れた時期と同様だと認識されていた. また,将来は山登りの習慣がなくなると予想していた. 人生の見通しがつく年齢は76歳までであるが,80歳まで生きることを希望していた. 加減速線は過去に下降し,将来は上昇,勾配の変化量は0.232であった.

2. 人生の見通しによる分類

加減速線の勾配とその変化量の組み合わせを分析した ところ、対象者は3つのタイプに分類された。各タイプ における加減速線の勾配、基本情報と語りの共通点を表 4に示す。

A氏, B氏, C氏の3名は、加減速線が過去は下降し、将来は高い値に変化しているタイプで、勾配の変化量は平均0.231であった。このタイプは年齢が平均67.3歳と他のタイプより高いため、退職からの年数も平均9.3年と長期間経過していた。将来に関する語りでは、新しい役割は増えないが、孫の成長が最も重要だと考えている点で共通していた。

F氏, H氏の2名は, 加減速線が過去は下降し, 将来

	$A \cdot B \cdot C$ 氏	F・H氏	D・E・G氏
加減速線の勾配(平均)			
過去	177	065	.228
将来	.054	.154	.024
変化量	.231	.219	204
基本情報			
年齢 (平均)	67.3歳	63.5歳	64.0歳
退職からの年数 (平均)	9.3年	1.8年	1.7年
経済状況	普通	厳しい	普通
学歴	高校卒業	大学卒業	高校卒業
語り			
新しい役割	増えない	増えない	増える
将来の仕事的な活動	共通点なし	現実的な内容あり	共通点なし
将来の楽しめる活動	共通点なし	継続を希望	継続を希望 旅行したい
将来の大切な活動	共通点なし	活動あり	共通点なし
将来の目標	共通点なし	具体的な目標あり	目標あり
将来の出来事で最も重要なこと	孫の成長	自分の最期	共通点なし
	最良の時期:	悪い時期なし	最良の時期:
過去の最良または最悪な時期	40歳代後半から	退職前後に	50歳代後半から
	50歳代前半	悪化傾向	60歳代前半

表4 各タイプにおける加減速線の勾配,基本情報と語りの共通点

は上昇しているタイプで、勾配の変化量は平均0.219であった。このタイプは年齢が平均63.5歳と最も若く、退職からの年数も平均1.8年と短期間で、最終学歴は大学卒業であった。将来に関する語りでは、今後の活動を明確に予測し、将来の目標を具体的に定め、自分の最期が最も重要だと考えている点で共通していた。

D氏、E氏、G氏の3名は、加減速線が過去は上昇し、将来は維持しているタイプで、勾配の変化量は平均-0.204であった。このタイプは年齢が平均64.0歳とF氏、H氏の次に若く、退職からの年数も平均1.7年と短期間であった。将来に関する語りでは、新しい役割が増え、旅行などの今後も楽しめる活動を予測し、何らかの将来の目標を定めているという点で共通していた。

考 察

1. 人生の見通しのタイプの特徴

1)過去波乱一将来挽回タイプ

A氏、B氏、C氏は、過去の加減速線が下降し、40歳代後半から50歳代前半に最良の時期が訪れた後に大きな負の出来事がある波乱の人生を送っていた。しかし、将来の加減速線がゆるやかに上昇し、挽回するように良好で安定した人生を見通していたため、過去波乱 – 将来挽回タイプと命名した。

このタイプについて,基本情報と語りの共通点から検 討すると,過去に人生が大きく悪化する物語をもち,退 職から長期間経過した高齢者は,今後の生活での新しい 役割の獲得を望んではいないが、家族の成長を見守りな がら安定した将来を見通すという特徴を示す可能性があ ると考えられる.

2) 過去悪化一将来回復タイプ

F氏、H氏は、過去の加減速線がゆるやかに下降し、明らかに悪いと認識された出来事はないものの退職前後で悪化傾向にある人生を送っていた。しかし、将来の加減速線が上昇し、本来の生活を取り戻すように回復する人生を見通していたため、過去悪化-将来回復タイプと命名した。

このタイプについて、基本情報と語りの共通点から検討すると、過去に人生がゆるやかに悪化する物語をもち、退職からの経過期間が短く、知的レベルが高い高齢者は、今後の生活を具体的に予測して目標を定め、自分の最期に向かってより豊かな将来を見通すという特徴を示す可能性があると考えられる.

3) 過去良好一将来維持タイプ

D氏、E氏、G氏は、過去の加減速線が大きく上昇し、50歳代後半から60歳代前半に最良の時期が訪れる良好な人生を送っていた。さらに、将来の加減速線はわずかに上昇するか勾配 0 で推移し、今後もそのまま安定する人生を見通していたため、過去良好-将来維持タイプと命名した。

このタイプについて,基本情報と語りの共通点から検

討すると、過去に人生が充実していく物語をもち、退職からの経過期間が短い高齢者は、今後の生活で新しい役割を担いながら、目標のある充実した生活を維持するような将来を見通すという特徴を示す可能性があると考えられる.

2. 将来の見通しを予測することの利点

作業療法では、クライエントの作業ストーリーを理解し、作業ニーズを明らかにして必要な援助を行う。しかし、高齢者に対して、将来の生活を洞察するように促し、今後の目標を設定することは困難な場合も多い。その際は、作業選択意思決定支援ソフト(Aid for Decision-making in Occupation Choice:ADOC) (3) などの意思決定を支援するツールの使用が推奨されるが、過去の作業ストーリーを聴取した時点で将来の見通しを予測することができれば、クライエントの意志を反映した作業療法の目標設定が可能になるであろう。例えば、作業ストーリーの聴取により、過去悪化ー将来挽回タイプであることが予測された場合、新しい役割の獲得よりも家族の一員としての役割を優先し、安定した生活を構築したいと考えている可能性を考慮した目標設定が必要になる。

また、この将来の見通しは、クライエントの作業同一性はの一部として捉えることができる。作業同一性とは、作業参加の個人史から作り出された作業的存在として、自分は何者であり、どのような存在になりたいのかという複合的な感覚と定義されるため、将来の見通しとの親和性は高い。したがって、将来の見通しを明らかにすることは、作業的存在としてのクライエントを支援し、その人らしい人生の構築に寄与する重要な視点になると考えられる。

しかし、本研究のような人生の見通しの予測は、従来の作業参加を継続できるような心身機能と環境が維持されている場合には該当する可能性が高いと思われるが、予期していなかった心身機能や環境の変化が生じて作業機能障害に直面してしまうと、その見通しは容易に崩れることが推測される。そのような状況であっても、予測される将来の見通しに関連する作業や役割への従事を促すことで、人生の再構築に寄与できる可能性は高いと考えられる。

ナラティブアプローチとは、社会構成主義の考え方に基づいて問題の外在化を図り、支配的な物語(ドミナントストーリー)を別の新しい物語(オルタナティブストーリー)に変化させる手法¹⁵⁾で、臨床場面では医学や看護学を中心に発展してきた経緯がある。それに対して作業療法では、クライエントの作業に着目し、新しい作業的ナラティブ¹⁶⁾を作り出すという異なる戦略を用いる。本研究の知見によって、退職を経験した高齢者の作業的ナラティブを豊かにし、作業機能障害の予防や改善

をもたらすことが期待される.

3. 将来の見通しを予測する方法の提案

本研究では、半構成的インタビューを通して、過去、現在、そして将来に至る人生の物語を効率的に聴取し、対象者のナラティブスロープを作成した。今回使用したインタビューガイドは、OPHI-IIの推奨質問を参考にしたものである。本来OPHI-IIは、5つのトピック領域に関する面接を通して、クライエントの作業同一性、作業有能性、作業行動場面(環境)の影響を測定するという目的があるID。同時に、クライエントの作業的生活史における特徴的な質的側面を捉えるためにナラティブスロープを作成し、その生活史を文章化するという目的もある。つまり、本論の手法はナラティブスロープを作成する点でOPHI-IIと共通しているが、将来の見通しを準統計学的手法で分析するための連続データを得ることが目的であることから、OPHI-IIとは性格を異にする手法である。

このように生活史の経時的変化を視覚化し、量的に分析できる可能性をMartynら¹⁸⁾ が指摘している. 福田ら¹⁹⁾ は、人生満足度曲線の心理的特性を明らかにするために、満足度の折れ線グラフを作成し、正負それぞれの面積値を算出することで、身体的健康度や精神的健康度との関連を検討した. しかし、生活史を面積で分析する手法では、ナラティブの変化そのものを数量化することは難しい. そこで今回、対象者とともに作成し、妥当性が担保されたナラティブスロープの傾向を加減速線により分析し、将来の見通しを予測した.

加減速線は観察された動向の傾きの推定値であり,各期間における傾きの違いを視覚的に比較することを可能にするものである²⁰⁾.本研究では,加減速線によって視覚化された過去と将来の勾配の組み合わせより,3つのタイプがあることを明らかにできたことから,過去のナラティブスロープより将来の見通しを予測するという目的に適した分析方法が選択できたものと考えられる.将来の見通しを予測するような詳細な検討を実施するためには,統計学的手法の適用も検討しなければならない.しかし,ナラティブスロープのような連続データを統計学的に処理するには自己相関の問題などもあるため,方法論のさらなる検討が必要になる.

4. 研究の限界

本研究は、8名という少数の対象者を分析し、将来の 見通しの特徴を明らかにしようとする萌芽的な研究であ り、全ての結果を一般化できるものではない。少なくと も、次のような限界がある。60歳代高齢者を対象者とし たが、早期退職により一部の者が退職から長期間経過し ていたことが結果に影響した可能性がある。また、全て の対象者が将来を良い方向に見通していたため、悪い方向に見通す者の検討はできなかった。今後は、研究結果の妥当性を検証するとともに、要介護状態の高齢者なども調査し、異なる見通しのタイプを蓄積していく必要がある。最後に、インタビューに同席した研究者の多さが語りの内容に影響した可能性があるが、全ての対象者は研究者のいずれかと旧知の関係であり、緊張感や圧迫感が結果に与えた影響は小さかったものと考えられる。

結 論

本研究では、退職後の60歳代高齢者8名に対してOPHI-IIの推奨質問を参考にした半構成的インタビューを実施し、人生の物語の筋書きを示すナラティブスロープを作成した。そのスロープを加減速線法によって分析したところ、60歳代の高齢者が描く人生の見通しは、過去波乱 - 将来挽回、過去悪化 - 将来回復、過去良好 - 将来維持という3タイプの特徴をもつことが明らかとなった。作業療法実践において高齢者の人生の見通しを理解することで、クライエントの意志を反映した目標設定が可能になるであろう。このような視点は、作業的存在としてのクライエントを支援し、その人らしい人生の構築に寄与できると考えられる。また、本論を通して、過去のナラティブスロープの傾向を加減速線法によって分析し、異なる将来の見通しを予測するための有益な方法が提案された。

謝辞

今回の調査にご協力いただいた対象者の皆様に深く感謝いたします.

文 献

- 1) 厚生労働省:2015年の高齢者介護―高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて、http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/, (参照2015-8-24).
- 2) 坂上真理:生活機能要素:老化.村田和香編著,作業療法学全書第7巻 作業治療学4老年期.第3版,協同医書出版,東京,2008,pp.43-50.
- 3) 古谷野亘:幸福な老いの研究. 古谷野亘,安藤孝敏編著,新社会老年学-シニアライフのゆくえ. ワールドプランニング,東京,2003, pp.141-153.
- 4) Ericsson EH, Ericsson JM (村瀬孝雄, 近藤邦夫訳): 心理・社会的発達の主要な段階. ライフサイクル, その 完結. 増補版, みすず書房, 東京, 2001, pp.69-112.
- 5) 中原純,藤田綾子:向老期世代と現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係.老年社会科学29(1):30-36,2007.
- 6) 佐藤晃太郎,山田孝:問題を外在化することにより,落 ち着いた生活を取り戻した高齢女性の一例―ナラティブ

- を重視した作業療法の効果. 作業行動研究13 (1): 20-26 2009
- 7) 宗形智成,山田孝:回復期リハビリテーション病院で肯定的な人生物語を紡ぎ出し,自宅復帰したADL全介助レベルの事例,作業行動研究17(1):36-45,2013.
- 8) Jonsson H, Josephsson S, Kielhofner G: Evolving narratives in the course of retirement: A longitudinal study. Am J Occup Ther. 54 (5): 463-470, 2000.
- 9) 野口裕二:言葉・物語・ケア. 物語としてのケアーナラ ティヴ・アプローチの世界へ. 医学書院, 東京, 2002, pp.13-31.
- 10) Kielhofner G, Mallinson T, Crawford C, Nowak M, Rigby M, et al. (山田孝監訳): 作業遂行歷面接第2版 OPHI-II 使用者用手引. 日本作業行動学会, 秋田, 2003.
- 11) Kielhofner G, Borell L, Holzmueller R, Jonsson H, Josephsson S, et al. (村田和香訳):作業的生活を加工すること. 山田孝監訳, 人間作業モデルー理論と応用. 第4版, 協同医書出版, 東京, 2012, pp.122-139.
- 12) 永井洋一:事例研究:シングルシステムデザイン. 山田 孝編著,標準作業療法学専門分野 作業療法研究法. 第 2 版, 医学書院,東京, 2012, pp.118-136.
- 13) Tomori K, Uezu S, Kinjo S, Ogahara K, Nagatani R, et al.: Utilization of the iPad application: Aid for Decisionmaking in Occupation Choice. Occup Ther Int. 19 (2): 88-97, 2012.
- 14) Kielhofner G (小林隆司訳): 行為の諸次元. 山田孝監訳, 人間作業モデルー理論と応用. 第4版, 協同医書出版, 東京, 2012, pp.112-121.
- 15) 野口裕二:外在化とオルタナティブ・ストーリー. 物語 としてのケアーナラティヴ・アプローチの世界へ. 医学 書院, 東京, 2002, pp.69-87.
- 16) Auzmendia AL, de las Heras CG, Kielhofner G, Miranda C (野藤弘幸,村田和香,谷村厚子訳):作業的ナラティブを再び加工すること. 山田孝監訳,人間作業モデルー理論と応用. 第4版,協同医書出版,東京, 2012, pp.335-359.
- 17) Kielhofner G, Forsyth K, Clay C, Ekbladh E, Haglund L, et al. (村田和香訳): クライアントと話すこと: 面接による情報収集評価法. 山田孝監訳, 人間作業モデルー理論と応用. 第 4 版, 協同医書出版, 東京, 2012, pp.283-308.
- 18) Martyn KK, Belli RF: Retrospective data collection using event history calendars. Nurs Res. 51 (4): 270-274, 2002.
- 19) 福田由紀,古川聡:人生満足度曲線の妥当性に関する検討-ライフラインの観点からの分析.法政大学文学部紀要54:95-106,2006.

20) Rose M (木原雅子, 木原正博訳): 単一事例実験デザイン. Liamputtong P編著, 現代の医学的研究方法 – 質的・量的方法, ミクストメソッド, EBP. メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京, 2012, pp.156-168.